

形而上学としての「存在と時間」

細川, 亮一

<https://doi.org/10.15017/2328591>

出版情報 : 哲學年報. 42, pp.89-120, 1983-01-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



形而上学としての『存在と時間』

細 川 亮 一

一

『存在と時間』はいかなる構想のもとに書かれているのか。我々はこの問いに一応次のように答えることができる。——『存在と時間』はハイデガーの思惟の道を規定した問い「すべての多様な意義を支配している単一な統一的な存在の規定とは何か」*πὸς τί λέγεται τὰ πολλαχῶς λεγόμενα*に答える試みである。『存在と時間』はその問いに「時間」*πὸς χρόνον*と答える。それ故『存在と時間』の基本定式は *τὸ οὖν λέγεται πολλαχῶς, ἀλλὰ πὸς χρόνον* である。この基本定式は『存在と時間』の根本構想をはっきりと示していると同時に、『存在と時間』がアリストテレスの存在論 *τὸ οὖν λέγεται πολλαχῶς, ἀλλὰ πὸς χρόνον* (οὐσίαν) の取り返し *Wiederholung* として構想されたことを示している。その意味で『存在と時間』は存在論として、西欧存在論の正統な嫡子である。¹⁾——

『存在と時間』が存在論であることは確かである。しかし『存在と時間』それ自身は、存在論を包括したより大きな構想のもとで書かれたのではないかと我々は問うことができる。だが『存在と時間』において、哲学は「普遍的な現象学的存在論」であるとはっきり言われている——すぐにこのように反論されるだろう。確かにハイデガーは哲学を次のように定式化している。

「哲学は普遍的な現象学的存在論であり、現存在の解釈学から出発する。現存在の解釈学は、*Existenz* の分

析論として、すべての哲学的に問うことの導きの糸の端を、そこからすべての哲学的に問うことが發し、entspringen²⁾、そこへと打ち返す、zurückschlagen³⁾とくに結びつけているのである。

とすれば哲学は現象学的存在論、以外の何ものでもないように見える。しかしまさにこの哲学の定式のうちにこそ、存在論を越える契機が隠されているのではないか。

この哲学の定式は『存在と時間』の最後の節（第八三節）「現存在の実存論的——時間的分析論と、存在一般の意味への基礎的存在論的問い」で再び取り上げられている。そこでハイデガーは哲学の定式を引用した後に、次のように言っている。「勿論このテーゼもドグマと見なされてはならず、むしろ未だ「隠されている」原則的な問題の定式化と見なされねばならない。すなわち存在論は存在論的に基礎づけられるのか、それとも存在論はそのためにも何らかの存在論的基礎を必要とするのか、いかなる存在者がこの基礎づけの機能を引き受けねばならないのか、という問題である。」(SZ, 436) 我々はこの「未だ隠されている原則的な問題」——存在論的存在論的基礎という問題——をどう理解すればよいのだろうか。この問題は『存在と時間』で明示された課題を越えているのではないか。

『存在と時間』は「時間性に向けて現存在を学的に解釈すること（現存在の分析論——第一編、第二編）と、存在への問いの超越論的地平として時間を説明すること（存在のテンポラリテートの分析論——第三編³⁾」（第一部）ならびに「テンポラリテートの問題性を導きの糸とする存在論の歴史の現象学的解体の概要」（第二部）という二重の課題をもっている。しかし「存在論的存在論的基礎」という「未だ隠されている問題」は、この「存在問題の仕上げにおける二重の課題」（序論第二章の表題）のうちに見出すことができない（Vgl. SZ, §5, 6, 8）。とすれば「未だ隠されている原則的な問題」は、『存在と時間』の明示されたプログラム（第八節）では未だ隠されている問題を暗示しているのではないか。それは存在論としての『存在と時間』を越えた構想——しかも『存在と時間』がそのもとで書かれた構想——を指し示しているのではないか。

「未だ隠されている原則的な問題」は現行の『存在と時間』の最後の節、言い換えれば未刊の第三編「時間と存在」の直前で論じられている。この第八三節「現存在の実存論的・時間的分析論と、存在一般の意味への基礎的存在論的問い」は、『存在と時間』第一編（現存在の実存論的・分析論）、第二編（現存在の時間的・分析論）の成果、ならびに「現存在の分析論」（第一、二編）が本来目ざしていた目標「存在一般の意味への基礎的存在論的問い」を確認し、第三編の課題（存在のテンポラリテートの分析論）を問いとして改めて提示している。とすれば「未だ隠されている原則的な問題」は第三編の展開と深く関わっているのではないか。第三編「時間と存在」こそが「未だ隠されている原則的な問題」の意味と射程を理解する鍵ではないか。そして『存在と時間』がそのもとで書かれたより大きな構想へと我々を導くのではないか。

しかし存在論としての『存在と時間』を越える契機が未刊の第三編のうちに隠されていたのだろうか。『存在と時間』第三編についてハイデガーは『ヒューマニズム書簡』で次のように言っている。

「主観性を放棄するこの異なった思惟を十分に追―遂行し、共―遂行することは、『存在と時間』の公刊に際し第一部第三編「時間と存在」がさし控えられたことによって確かに困難になっている（『存在と時間』三九頁）。ここにおいて全体が逆転する。問題になっている第三編がさし控えられたのは、思惟がこの転回 Kehre を十分に言うことに役立たず、形而上学の言葉の助けによっては切り抜けられなかったからである。一九三〇年に思惟され報告されたが、一九四三年にはじめて印刷された『真理の本質について』という講演は、「存在と時間」から「時間と存在」への転回の思惟に対して或る洞察を与える。この転回は『存在と時間』の立場の変更ではなく、試みられた思惟がこの転回において、そこから『存在と時間』が経験され、しかも存在忘却という根本経験のうちで経験された次元の場へと始めて達するのである。」

第三編「時間と存在」において「ここにおいて全体が逆転する」とはいかなることなのか。「存在と時間」から

「時間と存在」への転回」を我々はどう理解すればよいのか。『ヒューマニズム書簡』は転回が第三編の展開と深く関わっていることを主張している。しかし『存在と時間』で明示された課題（序論第二章）は「転回」について何も語っていない。では第三編における転回は、ハイデガーが後になって勝手に付け加えた暴力的な改竄なのだろうか。あるいは『存在と時間』の明示された課題を越えた構想——しかも『存在と時間』がそのもとで書かれた構想——のうちで、すでに転回が考えられていたのであるか。

我々はここでも『存在と時間』がそのもとで書かれたより大きな構想という問題に突き当たった。とすれば「未だ隠されている原則的な問題」と「転回」とは、『存在と時間』の明示された課題を越えた構想を指示していることにおいて、密接に関係しているのではないか。——『存在と時間』の明示されたプログラムを越え、しかもそのもとで『存在と時間』が書かれた構想を明らかにし、「未だ隠されている原則的な問題」の意味と射程を捉えること——これが本稿の課題である。この試みは同時に『ヒューマニズム書簡』で語られた転回の解明へと我々に導くはずである。

二

しかしそもそも『存在と時間』を書いていた時点で、『存在と時間』の明示されたプログラム（第八節）を越えた構想があったのだろうか。その問いに対し我々は、『存在と時間』における哲学の定式に潜む「未だ隠されている原則的な問題」こそがその構想の存在を示している、と答えたい。しかしその構想の存在をいかにして確認しうるのか。その構想の具体的な内実、その意味と射程をいかにして知ることができるのか。

『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた問題を暗示している「未だ隠されている原則的な問題」と「転回」は、ともに第三編「時間と存在」に深く関わっている。とすれば第三編こそが問題となっている構想を我々に教えてくれるだろう。しかし第三編を現行の『存在と時間』に続けて書くことは放棄された。「後半部は四分の一世紀

後では、前半部が新たに叙述されるのでなければもはや書きつがれない。」確かに「『存在と時間』の公刊に際し第一部第三編「時間と存在」がさし控えられた」(Bd. 9, S. 327)ことによって「『存在と時間』の真の理解が困難になったと思う。——存在論としての『存在と時間』の意味と射程、さらに『存在と時間』で明示されたプログラムを越えた構想、を捉えることが困難になっているのである。しかし現在我々は第三編「時間と存在」に属している『現象学の根本問題』を知っている。それは『存在と時間』が出版された一九二七年の夏学期講義である。そうであるとすれば我々は『現象学の根本問題』に手がかりを求めることができるだろう。

『現象学の根本問題』という講義は三部に分れている (Bd. 24, S. 32)。

第一部「存在についての若干の伝統的テーゼの現象学的——批判的論究」

第二部「存在一般の意味への基礎的存在論的問い。存在の根本構造と根本様式」

第三部「存在論的学的方法と現象学の理念」

第一部は第二部への導入部であり、第二部こそがこの講義の、すなわち基礎的存在論の頂点をなすはずであった。

第二部の表題は『存在と時間』第八三節の表題の後半「存在一般の意味への基礎的存在論的問い」——それは第三編の課題を示している——に対応している。それ故『現象学の根本問題』第二部が『存在と時間』第三編の根本課題に答える試みである、とすることができ。

第二部は四章から成っている。

第一章「存在論的差異（存在と存在者との区別）の問題」

第二章「存在の根本分節（エッセンチア、エクシステンティア）の問題」

第三章「存在の可能な変様とその多様性の統一の問題」

第四章「存在の真理性格」

この講義は第二部第一章で中断している。にもかかわらずこの『現象学の根本問題』は「存在と時間」第三編を知するための最も重要な講義である。それ故その検討は存在論としての『存在と時間』の根本構想を捉えるために避けることのできない課題である。しかし本稿の課題は「存在論の存在的基础」という「未だ隠されている原則的な問題」である。我々はこの問題を『現象学の根本問題』のどこに見出すことができるのだろうか。それは第三部第一章の表題「存在論の存在的基础と、基礎的存在論としての現存在の分析論」から明らかである。

ハイデガーは第三部の内容を予告する序論第五節「存在論的方法的性格。現象学的方法の三つの根本部分」で次のように言っている。「存在の真理性格の分析は、存在もいわば存在者すなわち現存在に根拠づけられていることを示す。存在が与えられているのはただ、存在了解すなわち現存在が実存するときだけである。」(Bd. 24, S. 26)「存在の真理性格」は第二部第四章の主題であった。それについて次のように言われている。「存在が与えられているのはただ、開示性が存在するときだけ、すなわち真理が存在するときだけである。しかし真理が存在するのはただ、その存在者の存在様式に開示すること自身が属するという仕方で開示する存在者が実存するときだけである。我々自身がそのような存在者なのである。」(Bd. 24, S. 25)——「存在についての学」である存在論は、存在が与えられているかぎりにおいて可能である。しかし存在が与えられているのは真理が存在するときであり、真理が存在するのは開示する存在者、すなわち我々がそれである現存在が実存するときだけである。とすれば存在論が可能であるのは現存在という存在者が実存するかぎりにおいてである。それ故次のように言われる。「存在論はそれ自身純粋に存在論的に基礎づけられない。存在論固有の可能性は存在者、存在的なものへ差し戻される、すなわち現存在へ差し戻される。存在論は存在的基础をもっているのである。この存在的基础は哲学の今までの歴史においても何度も透かし見られ、例えばすでにアリストテレスが「第一哲学、存在についての学は神学である」と言ったことのうちに表現されて

「no」(Bd. 24, S. 26)

『現象学の根本問題』第三部第一章は『存在と時間』第八三節で語られた「存在論の存在的基础」という「未だ隠されている問題」を扱う予定であった。『現象学の根本問題』は『存在と時間』第三編に属している。それ故「存在論の存在的基础」という「未だ隠されている問題」は、第三編「時間と存在」で展開されることになっていた——このことが確認できる。さらに存在論の存在的基础が論じられるのは「存在—真理—現存在」という連関上においてである。「存在と真理」という問題連関のうちで存在論の存在的基础が問い返されるということは忘れられてはならない。

しかしさし当りここで我々にとって重要なのは、存在論の存在的基础という問題がアリストテレス形而上学における神学、という規定に関わっているということである。我々は存在論の存在的基础という問題において「存在論—神学」の二重性という形而上学の問題に出会っているのではないか。そうであるとすれば『存在と時間』での哲学の定式に隠されている原則的な問題は「存在論—神学」としての形而上学に関わっている、と言うことができる。『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた構想とは形而上学の構想ではないか。『存在と時間』での哲学の定式において、「哲学が現象学的存在論である」ことだけが表現されているのではない。我々はそこに「存在論—神学」としての形而上学を読み取らねばならない。

『現象学の根本問題』第三部第四章は「現象学的存在論と哲学の概念」である。この表題は『存在と時間』の哲学の定式「哲学とは現象学的存在論である……」を我々に想起させる。この哲学の定式のうちには「存在論—神学」としての形而上学という問題が隠されている。とすれば『現象学の根本問題』第三部第四章は、序論で語られた「哲学とは存在についての学（存在論）である」というテーゼを、「存在論の存在的基础」を媒介として、「哲学とは「存在論—神学」としての形而上学である」というテーゼへと発展させること、その意味で「哲学の概念をより具体的に限定すること」（Bd. 26, S. 32）を課題としていた、と言えるだろう。とすれば哲学の概念はもはや単なる現象学的

存在論でなく、「存在論—神学」としての形而上学へと具体化されるのではないか。

我々は「存在論の存在的基础」という問題のうちで「存在論—神学」としての形而上学に出会った。ハイデガーは序論第三節「存在についての学」で、アリストテレス『形而上学』の有名な言葉「まことに昔も今もつねに問い求められ、つねにアポリアに陥るところの「存在者とは何か」という問いは、「ウーシアとは何か」である」を存在論の根本的問いとして引用している (Bd. 24, S. 19)。そして序論第五節で「存在論の存在的基础」という問題がアリストテレス形而上学における神学という規定に関わっていると述べている。とすればハイデガーの形而上学構想はアリストテレス形而上学における「存在論—神学」の二重性を、その根源的可能性において取り返すこと *Wiederholung*⁹⁾ ではないだろうか。我々が一で問題とした『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた構想は、アリストテレス形而上学の取り返しとしてある、と言えるのではないか。

しかし『存在と時間』における哲学の定式のどこに、形而上学構想が隠されているのか。この形而上学構想は転回 *Kehte* といかなる関係にあるのか。そもそも我々はハイデガー自身の形而上学構想をどこに見出すことができるのか。——我々は一九二八年の夏学期講義『論理学の形而上学的基础』のうちに彼自身の形而上学構想を見ることができる。

三

『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた構想はアリストテレス形而上学の取り返しとしてある、と我々は主張した。『論理学の形而上学的基础』(以下『論理学』と略)の序論Ⅲで、ハイデガーは「アリストテレスによる哲学の規定」について論じている。それ故我々はそれを検討しよう。

ハイデガーはまずアリストテレスの『形而上学』から引用している (Bd. 26, S. 12)。「存在者としての存在者と、

これに自体的に属するものを探究する一つの学がある。」(T 1, 1003 a 21 f.) ハイデガーは存在者としての存在者を探究する学、存在という観点において存在者を探究する学を存在についての学、存在論とよんでいる。「しかし同時にアリストテレスは神学としての本来の哲学につづて語っている。(Met. E1, 1026 a 18 ff.)」(Bd. 26, S. 13) 神学 *theologia* は *theos* すなわち圧倒的なものの *Übermächiges* を扱う。それ故「第一哲学としての哲学は二重の性格をもつ。哲学は存在についての学であり、圧倒的なものについての学である。(この二重性格は実存と被投性の二重性に対応している。)」(Bd. 26, S. 13) かくして我々は「存在論—神学」というアリストテレス形而上学の二重性格に出会う。「形而上学の概念は「存在論」と「神学」の統一を包括している。……(a) 存在そのものと(b) 存在者全体が問題である。」(Bd. 26, S. 33) しかし「存在論」と「神学」としての哲学というアリストテレスの二重性格を指摘しても、我々自身が根源的な了解可能性を伴っているかないかによって、何も語っていないことも、すべてを語っていることにもなる。」(Bd. 26, S. 17) それ故ハイデガーは次のように言う。「いかなる意味で、またどの程度、神学は哲学の本質に属するのか。このことを示すために我々は、アリストテレスが全く規定せずに神学として哲学と組み合わせたものが哲学の本質に帰属しているということを、存在論の概念を根源化するという仕方では理解しなければならぬだろう。」(Bd. 26, S. 17)

しかし存在論の概念を根源化するとはいかなることなのか。それは「このような学（存在論）にいかなる内的可能性と課題とがあるのか、そしていかなる基礎に基づいているのか」(Bd. 26, S. 16) を明らかにすることではないか。存在論の内的可能性と課題とは究極的には存在一般の意味への基礎的存在論的問いに答えること（『存在と時間』第三編、『現象学の根本問題』第一部、第二部）であり、存在論の基礎とは存在論の存在的基础（『存在と時間』第八三節、『現象学の根本問題』第三部第一章）を意味していると考えられる。このことを確認し、さらにハイデガー自身の形而上学構想を知るために、我々は『論理学』の補遺「基礎的存在論の理念と機能との特徴づけ」を検討しなけ

ればならない。

その補遺の最初でハイデガーは基礎的存在論について語っている。「我々は基礎的存在論を存在論一般の基礎づけと理解する。それには次のことが属する。(一)形而上学の根本問題としての存在の問いの内的可能性を提示しつつ基礎づけること——現存在を時間性として解釈すること (二)存在の問いに含まれている根本問題の論究——存在問題のテンポラールな解明 (三)この問題性の自己了解の展開、その課題と限界——転化 Umschlag」(Bd. 26, S. 196)

(一)は『存在と時間』の第一編、第二編「時間性に向けて現存在を学的に解釈すること」の課題である。(二)は『存在と時間』の第三編、『現象学の根本問題』第一部、第二部に対応している。(三)は『現象学の根本問題』第三部の課題と重なっていると一応言うことができる。しかし最後に言われている転化とは一体何を意味しているのだろうか。それは「基礎的存在論は形而上学の概念を汲尽くしていない」(Bd. 26, S. 199)ことと関係があるのではないか。この転化のうちに我々は基礎的存在論を越える構想を見出しうるのではないか。

ハイデガーは次のように言っている。「存在論がそこから出発したところへ存在論が打ち返す *zurückschlagen* という内的必然性は、人間の実存という根源現象において明らかにされる。すなわち「人間」という存在者が存在を了解し、存在の了解のうちに同時に存在と存在者の区別の遂行がある。存在が与えられているのはただ現存在が存在を了解しているときだけである。言い換えれば、了解のうちに存在が与えられているという可能性は現存在の事実的実存を前提にしている。そして現存在の事実的実存は更にまた自然の事実的事物存在を前提にしている。」(Bd. 26, S. 199) ここで語られているのが「存在論の存在的基礎」という問題であることは明らかである。しかもこの問題が「存在論がそこから出発した *ausgehen* とくくへと存在論が打ち返す *zurückschlagen* という内的必然性」として提示されている。我々はここで『存在と時間』における哲学の定式を想起する。「哲学は普遍的な現象学的存在論であり、現存在の解釈学から出発する *ausgehen*。現存在の解釈学は実存の分析論として、すべての哲学的に問うこと

の導きの糸の端を、そこから哲学的に問うことが発し、そこへと打ち返す、zurückschlagen ところに結びつけているのである。」我々は「存在論の存在的基础」という「未だ隠されている原則的な問題」が哲学の定式のどこに隠れていたのかをはっきりと知り得る。「そこからすべての哲学的に問うことが発したところへ、すべての哲学的に問うことが打ち返す」ことのうちに「存在論の存在的基础」という問題が隠されていたのである。「そこからすべての哲学的に問うことが発し、そこへと打ち返すところ」とは実存である。だからこそ「存在論がそこから出発したところへと存在論が打ち返すという内的必然性は、人間の実存、という根源の現象において明らかにされる」と言われるのである。「すべての哲学的に問うことが実存から発する」とは、現象学的存在論が実存の分析論としての現存在の解釈学から出発することを意味している。あるいは「そこからすべての哲学的に問うことが発する entspringen」とは「そこから他のすべての存在論がはじめて発する entspringen ことができる基礎的存在論は、現存在の実存論的分析論のうちに求められねばならない。」(SZ, 13) に対応している。とすれば哲学の定式における「すべての哲学的に問うことが実存から発する」という表現は、基礎的存在論の成立を語っていることになる。では「すべての哲学的に問うことが実存へと打ち返す」ことによって一体何が成立するのだろうか。存在論は存在的基础として、存在を了解する現存在という存在者を前提している。現存在という存在者はそれ自身実存するために、自然の存在を前提せざるを得ない。こうして我々は現存在という存在者から存在者全体という問題に導かれる。

ハイデガーはここで「メタ存在論」Metontologie という理念を提示している。「ここから存在者全体を主題とする固有の問題性の必然性が明らかとなる。この新たな問題設定は存在論自身の本質のうちにあり、存在論の転化 Umschlag, Metabolé から生じる。この問題性を私はメタ存在論と名づける。メタ存在論的—実存的問いのこの領域のうちに実存の形而上学の領域もある（ここではじめて倫理学の問いが問われる）」(Bd. 26, S. 199) メタ存在論を我々はどう理解すればよいのか。そもそも何故メタ存在論と名づけられたのか。まずメタ存在論 Meta-Ontolo-

gie という名称は直接的には *meta-Bohly* の *meta-* に由来する。メタ存在論は存在論の根源化による存在論の転化によって成立するからである。またメタ存在論が存在論の転化によって可能になるとすれば、存在論の後に置かれる。メタ存在論のメタは「存在論の後に」を意味している。さらにメタ存在論のメタは「越えて」という意味を含意する。存在論の存在的基础、存在論が前提している存在者全体がそこで問い返されるからである。メタ存在論は存在論の存在的基础——現存在という存在者と存在者全体——を問うのである。それ故メタ存在論は形而上学的存在者論 *Ontik* とよばれる。

しかし存在論のメタ存在論への転化を我々はいかに考えればよいのか。それは基礎的存在論とどう関わっているのか。「存在論の基礎づけと仕上げの全体が基礎的存在論である。基礎的存在論は(1)現存在の分析論と(2)存在のテンポラリテートの分析論である。しかしこのテンポラールな分析論は同時に転回 *Kehe* である。この転回のうちで存在論自身が形而上学的存在者論 *metaphysische Ontik* ——そのなかに存在論が非明示的につねに立っている——へと明示的に還帰するのである。根源化と普遍化との動性によって存在論を、存在論のうちに潜在している転化へともたらしことが肝要である。そこで転回することが遂行され、メタ存在論への転化に到るのである。」(Bd. 26, S. 201)

「(1)現存在の分析論」は『存在と時間』第一編、第二編に、そして「(2)存在のテンポラリテートの分析論」は『存在と時間』第三編に対応している。テンポラールな分析論すなわち存在のテンポラリテートの分析論が同時に転回であるとするれば、『存在と時間』第三編において転回が遂行されることになっていた——このことが確認できる。しかも形而上学的存在論 *Ontik*、すなわちメタ存在論は、存在論が前提している現存在という存在者 *Ontisches*、存在者全体を問い返す。言い換えれば存在論の存在的基础 *ontisches Fundament* を問うのである。とすれば『存在と時間』の最後の節(第八三節)で語られた「未だ隠されている原則的な問題」は、メタ存在論への転化、転回を意味していることになる。

形而上学はアリストテレスによれば「存在論—神学」という二重性格をもっていた。存在論が存在者としての存在者についての学、存在についての学であるのに対し、神学は圧倒的なもの *theia*、存在者全体についての学であった。メタ存在論は存在者全体を主題とするが故に、形而上学における神学に対応している。それ故「基礎的存在論—メタ存在論」は「存在論—神学」としての形而上学の取り返しとしてある、と言える。とすれば転回は基礎的存在論からメタ存在論への転回として、形而上学の内、部での転回を意味していることになる。事実「基礎的存在論—メタ存在論」は形而上学を形成するのである。

「基礎的存在論とメタ存在論はその統一性において形而上学の概念を形成している。しかしこのことのうちに、第一哲学 *prōtē philosophia* と神学 *theologia* としての哲学の二重概念によってすでにさきに序論で言及された哲学自身の根本問題の変化が表現されているにすぎない。そしてこのことはただ存在論的差異のその都度の具体化、すなわち存在了解の遂行の具体化である。言い換えれば、哲学は実存の形而上学的本質の中心的、全体的な具体化なのである。」(Bd. 26, S. 202)——「基礎的存在論—メタ存在論」が形而上学を形成していること、そしてそれがアリストテレス形而上学の二重性「存在論—神学」の取り返しとしてあること——このことが確認される。ハイデガー自身の形而上学はアリストテレス形而上学の取り返しとして構想されたのである。取り返しとは単なる繰り返しではなく、かつて実存していた現存在の可能性に応答し、その実存可能性を己の可能性として根源的に取り返すことである。アリストテレスは神学がいかなる意味で哲学（形而上学）の本質に属するかを問わなかった (Bd. 26, S. 17)。形而上学の二重性の統一を問い返さなかったのである。ハイデガーは存在論を根源化することによって、メタ存在論への転化、転回を遂行する。この転回は存在論的存在的基礎、前提を問い返すこととして根拠への還帰である。しかし転回は単に存在論の根拠への還帰であるだけではない。「基礎的存在論とメタ存在論はその統一性において形而上学の概念を形成している」のであり、両者は単に並存しているのではなく、「1」(Bd. 26, S. 200)なのである。転回

は基礎的存在論からメタ存在論への転回として、形而上学の二重性の統一、その意味で形而上学の根拠に関わっている。ここで構想されている転回は、「形而上学の内部での、形而上学の根拠への還帰」なのである。

ハイデガーは形而上学の二重性の統一を存在論的差異に求めている。「存在論的差異は人間の実存の根源現象、根源現象そのものである」(BdI. 26, S. 200) が故に、形而上学、すなわち哲学は「実存の形而上学的本質の中心的、全体的な具体化」なのである。形而上学の二重性の統一は実存のうちに求めることができる。我々はここで再び『存在と時間』の哲学の定式を想起する。「そこからすべての哲学的に問うことが発し、そこへと打ち返すところ」とは実存であった。「そこから哲学的に問うことが発する」という表現は基礎的存在論の成立を語っている。そして「そこへと哲学的に問うことが打ち返す」という表現のうちに、我々はメタ存在論への転化を読み取ることができる。

「実存へと打ち返す *zurückschlagen*」とは存在論が前提している「現存在の事実的な実存」を問い返すこととして、メタ存在論への転化 *Umschlag*、転回なのである。「実存へと打ち返す」とは存在論の存在的基础、前提を問い返すこととして、転回を意味している。転回は基礎、根拠への転回なのである。しかしさらに「すべての哲学的に問うことの導きの糸の端を、そこからすべての哲学的に問うことが発し、そこへと打ち返すところ (実存) に結びつける」ことによって、形而上学の二重性の統一、その根拠が確保されているのである。『存在と時間』の哲学の定式のうち、「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学構想と、その統一性を我々は読み取ることができるのである。『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた構想——しかも『存在と時間』の哲学の定式のうちに隠されている構想——とは、「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学構想である。

我々は『論理学』の補遺⁽¹⁵⁾に基づいてハイデガー自身の形而上学構想を検討した。そして『存在と時間』の哲学の定式のうちに転回 *Kehe* を見出した。それは形而上学の内部における、基礎的存在論からメタ存在論への転回であった。——かくして我々は『ヒューマニズム書簡』で語られていた転回を主題的に論究しうる地点にはじめて到ったの

である。

四

我々はもう一度『ヒューマニズム書簡』を引用しよう。

「主観性を放棄するこの異なった思惟を十分に追―遂行し、共―遂行することは、『存在と時間』の公刊に際し第一部第三編「時間と存在」がさし控えられたことによって確かに困難になっている（『存在と時間』三九頁）。ここにおいて全体が逆転する。問題になっている第三編がさし控えられたのは、思惟がこの転回を十分に言うことに役立たず、形而上学の言葉の助けによって切り抜けられなかったからである。一九三〇年に思惟され報告されたが、一九四三年にはじめて印刷された『真理の本質について』という講演は、「存在と時間」から「時間と存在」への転回の思惟に対して或る洞察を与える。この転回は『存在と時間』の立場の変更ではなく、試みられた思惟がこの転回において、そこから『存在と時間』が経験され、しかも存在忘却という根本経験のうちで経験された次元の場合へと始めて達するのである。」(Bd. 9, S. 327 f.)

我々はまず「存在と時間」から「時間と存在」への転回」についてのいくつかの可能な解釈を検討しよう。

第三編の表題「時間と存在」は『存在と時間』という書名を逆転させたものである。だから第三編「時間と存在」において『存在と時間』全体が逆転することになっていたことは、第三編の表題から明らかである——このような解釈が一応可能である。我々はこの一見もつともな解釈をまず検討しよう。もし「存在と時間」という表現が『存在と時間』で明示されたプログラム（第八節）全体を意味しているとすれば、第三編「時間と存在」はそのプログラムの一部をなすのだから、「存在と時間」から「時間と存在」へ」という表現は不可能である。それ故「存在と時間」という表現は現行の『存在と時間』、すなわち第一部の第一編、第二編のみを指しているとされねばならない。では第

一編、第二編が「存在と時間」とよばれ、第三編「時間と存在」がその逆転であるとされるのは、いかなることなのか。それは一応次のように考えられる。——第一編、第二編の探究は「存在から時間へ」と進み、第三編は「時間から存在へ」と探究を進める。それ故探究の方向が逆転する。——確かに第一編「現存在の準備的基礎的分析論」では「存在、了解をもつ現存在」がその存在構造において分析される。「存在、問題から存在了解をもつ現存在の分析論へ」すなわち「存在から現存在へ」の移行がなされる。第二編「現存在と時間性」では現存在の存在構造が時間性へと深められるという仕方で「現存在から時間へ」が遂行される。それ故第一編、第二編は「存在↓現存在↓時間」という仕方で「存在から時間へ」と分析が進んでいる。それに対し、第三編「時間と存在」は時間（テンポラリテート）から存在を解釈することによって存在一般の理念を獲得し、「時間から存在へ」達するはずであった。¹⁶それ故、第一編、第二編と、第三編との間に、探究方向の逆転といったことが指摘できる（「存在から時間へ」↓「時間から存在へ」、あるいは時間だけに着目して「時間へ」↓「時間から」）。

しかし『存在と時間』は「存在↓現存在↓時間↓存在↓現存在」という「存在—現存在—時間」の三位一体の深まりゆく円環として構想されているのであり、探究方向の逆転はこの円環の一部を取り出して対立させたにすぎない。第三編の表題「時間と存在」はこの円環の一部「時間↓存在」を表現しているのである。それは第二編「現存在と時間性」が「現存在↓時間（時間性）」を表現しているのと同様である。¹⁷それは決して「ここにおいて全体が逆転する」と語られるようなことではないのである。

我々はそれとは違った探究方向の逆転を指摘できる。『存在と時間』は現存在の分析論から出発している。現存在の分析論は現存在という存在者をその存在において規定し、このことに基づいて存在一般の理念を説明しようとする。しかし存在一般の理念が獲得されると、今度は逆に、この存在一般の理念に基づいて、現存在の分析論が本来的な存在論的地盤のうえでより根源的に展開されねばならない（Vgl. SZ, 17）。ここに「現存在の分析論から存在一般の理念

へ（現存在から存在へ）」から「存在一般の理念から現存在の分析論へ（存在から現存在へ）」という探究方法の逆転を見出すことができる。存在一般の理念の解明は第三編の課題であるから、この逆転は第三編で生じるだろう。第三編において全体が逆転する。——しかしこの探究方向の逆転もまた、『存在と時間』の「存在↓現存在↓時間↓存在↓現存在」という深まりゆく円環の一部を取り出して対立させたにすぎない。しかも「現存在の分析論から存在一般の理念へ」と「存在一般の理念から現存在の分析論へ」とは、ともに、基礎的存在論の内部での課題である。それ故「ここにおいて全体が逆転する」と表現される事態をここに見出しえない¹³。しかもこの解釈では逆転が第一編、第二編と第三編との間では生じないことになる。存在一般の理念が獲得されるのは第三編の展開によってだからである。

第三編をも含む第一部全体が「存在—現存在—時間」という三位一体の深まりゆく円環をなしているとすれば、転回を第三編の終りに、すなわち第一部から第二部への移行のうちに求める可能性しか残っていないように見える。しかしそれが「存在と時間」から「時間と存在」への転回」とよびうるかどうかを問わないとしても、この第一部から第二部への移行を「ここにおいて全体が逆転する」と言うことはできないだろう。何故なら第二部は、第一部の成果である存在の「テンポラリテートの問題性を導きの糸とする存在論の歴史の現象学的解体」を課題とするのであり、「存在のテンポラリテート」という基礎的存在論の根本問題に属しているからである。しかもこの「存在論の歴史の解体」を完遂することによって、「存在の問いは存在の意味への問いが不可避であることの完全な証明を獲得し、この問いの「取り返し」を語るこのの意味を論証する。」（SZ, 26）第二部の展開は第一部の端初（存在の意味への問い）へと還帰する。『存在と時間』の第一部と第二部は円環をなしている。その意味で第一部、第二部はともに存在の意味を問う基礎的存在論に属している。第一部から第二部への移行において「全体が逆転する」とは言えないのである。

『存在と時間』の明示されたプログラム全体は、基礎的存在論という統一のうちにある。それ故そのなかに「全体

が逆転する」という事態を見出すことは不可能である。そうだとすれば第三編において「ここにおいて全体が逆転する」というハイデガーの自己解釈は暴力的な改釈として斥けられるべきだろうか。

あるいはハイデガーの自己解釈を神託として盲目的に信じるべきだろうか。第三編において「主観性を放棄する異なった思惟」が展開され、そこで脱—存 *Ek-sistenz* が思惟されることになっていた——このことを認めるべきなのだろうか。第一編、第二編が「存在への現存在の関わり」を論じたのに対し、第三編は「現存在への存在の関わり」が論じられることになっていた——たとえそれが明示されたプログラムのうちに見出せないとしても。かくして後期ハイデガーをそのまま第三編に押しつけ、「後期ハイデガーへの転回」を盲目的に信じるに到る。あるいは第二部「存在論の歴史の解体」のうちに、後期ハイデガーの存在史を読み込み「存在史における転回」を何の根拠もなく断言することになる。¹⁵⁾

我々は転回に対するハイデガーの自己解釈に対していかなる態度をとるべきなのか。我々は『存在と時間』に対するハイデガーの自己解釈を単に暴力的な改釈として斥けるべきでもないし、また神託として盲目的に信じるべきでもない。ハイデガーの自己解釈を『存在と時間』そのものに、即して、批判的に吟味すること——これが我々の態度でなければならぬ。確かに『存在と時間』の明示されたプログラムのうちに転回を見出すことはできない。しかしこれを認めることは、転回を暴力的な改釈として斥けることでもないし、何の根拠もなく神託として信じることもない。『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた構想——しかも『存在と時間』に、即して、確認しうる、構想——のうちに転回を見出すことが、我々の態度でなければならない。

では「ここにおいて全体が逆転する」、「存在と時間」から「時間と存在」への転回」を我々はどう解釈するのか。

——我々は『論理学』（一九二八年夏学期講義）に即してハイデガー自身の形而上学構想「基礎的存在論—メタ存在論」を検討した。この形而上学構想においてメタ存在論への転化、転回が語られていた。しかもこの転回は『存在と

時間』の哲学の定式に隠されていた原則的な問題に関わっている。第三編「時間と存在」は存在の意味への基礎的存在論的問いに答えることを通して、存在論の存在的基础という問題に直面する。これが「メタ存在論への転回」へと基礎的存在論を導く。哲学の定式における「すべての哲学的に問うことが実存へと打ち返す」という表現こそが、第三編での転回を指示しているのである（三参照）。

以上の考察に基づいて転回についていくつかの論点を提示したい。

まず第三編「時間と存在」において転回が生じる予定であったことが、『存在と時間』に即して確認できる。第三編において全体が逆転する。しかし転回は第一編、第二編と第三編との間で生じるのではない。第三編の課題である「存在の意味への基礎的存在論的問い」に具体的に答える試みの後に、すなわち第三編の終りにおいて全体が逆転する。それ故「全体」とは第一編、第二編、第三編の全体、すなわち基礎的存在論全体を意味する。基礎的存在論の全体が逆転し、メタ存在論へと転化するのである。メタ存在論への転化は存在論が前提していた存在論の存在的基础を問い返すことである。その意味で転回は根拠への還帰であって、決して探究方向の単なる逆転ではない。単なる逆転はそれが逆転する当のものに囚われたままであり、同じ次元にとどまるにすぎない。²⁰

では「存在と時間」から「時間と存在」への転回」という表現を我々はどう解釈すればよいのか。第三編で「主観性を放棄する異なった思惟」が展開され、そこで脱—存が思惟されることになっていたかの如く、ハイデガーは語っている。確かに「主観性の放棄」が第三編ですでに予定されていたと考える必要はないし、そう考えるのは誤りである。しかし実存 Existenz、脱—存 Ek-sistenz が語られている文脈のうちで、ハイデガーが第三編での転回に言及しているということは重要である。実存、脱—存と転回とはいかなる関係にあるかが問われなければならない。すでに我々は「すべての哲学的に問うことが実存へと打ち返す」ことのうちに転回を確認した。とすれば「実存へと打ち返す」ことが転回を表現しているが故に、実存、脱—存が主題となっている文脈のうちで、第三編での転回が語

られたのではないか。事実ハイデガーは『ヒューマニズム書簡』で、哲学の定式の当該箇所と脱—存とを結びつけている。『存在と時間』（三八頁）で哲学のすべての問うことが「実存へと打ち返す」と言われている。しかし実存はここでは「私は思惟する」ego cogito の現実性ではない。実存は共に相互に働き合い、自己自身へと還る主観の現実性にすぎないのでない。「脱—存」Ek-sistenz はすべての実存 *existentia*, *existence* と基礎的に区別され、存在の近みのうちに脱—自的に住むことなのである。（Bd. 9, S. 343）ここで「実存から発する」ではなく、「実存へと打ち返す」が引用されていることに注意しなければならない。それは「実存へと打ち返す」ことが、第三編での転回を指示しているからである。確かに「実存へと打ち返す」における実存がすでに脱—存を意味していたと想定する必要はないし、すべきでもない。しかし「実存へと打ち返す」という表現が「脱—存を思惟し主観性を放棄した思惟」を指示している、すなわち転回を指示している、とハイデガーが主張していること——このことに留意すべきである。「実存へと打ち返す」という哲学の定式の表現が第三編での転回を示しているという我々の解釈は、ハイデガー自身によって確認されるのである。しかし「実存へと打ち返す」ことは形而上学の内部での転回であった。この転回の試みが実存を脱—存として捉え返すこと、主観性を放棄する異なった思惟へとハイデガーを導いたことも同時に確認することができる。形而上学の内部での転回の試みは形而上学の克服としての転回へと深化されるのである。

「問題になっている第三編がさし控えられたのは、思惟がこの転回を十分に言うことに役立たず、形而上学の言葉の助けによっては切り抜けられなかったからである。」

「実存へと打ち返す」ことが第三編での転回を示している。とすれば「存在と時間」から「時間と存在」への転回」において、「存在」と「時間」の語順の逆転に目を奪われずに、「存在と時間」「時間と存在」の「と」に注目すべきである。「存在と時間」から「時間と存在」への転回」において、「と」こそが転回の軸である。「存在と時間」の「と」が現存在を介してのみ成立するが故に、『存在と時間』における「と」は現存在（あるいは実存）を意味し

ている。「実存へと打ち返す」こととしての転回は「存在と時間」「時間と存在」の「と」へと還帰することである。「存在と時間」から「時間と存在」への転回」とは、基礎的存在論の全体が存在論の存在的基础である現存在（存在と時間）「時間と存在」の「と」を問い返すこととして、メタ存在論へと転化すること、哲学的に問うこと（基礎的存在論）がそこから発した実存へと打ち返すことである。

それ故『存在と時間』の形而上学構想における転回は『存在と時間』の立場の変更ではない。——しかし転回の試みは形而上学の克服へと導いたのではないか。そして『存在と時間』の立場は形而上学ではなかったか。とすれば転回は『存在と時間』の立場の変更へと導いたことになるのではないか。——我々はこの問いに対し、形而上学の内部での転回の試みそれ自身が形而上学の克服としての転回へと深化したということを指摘したい。さらにこのことをより積極的に言うことができる。——形而上学の二重性の統一、その意味で形而上学の根拠へと還帰する試み（形而上学の形而上学）である転回は、形而上学の根拠へと真に還帰するために、形而上学の克服としての転回へと深化するのである。——転回が『存在と時間』の立場の変更ではないとは、『存在と時間』が形而上学の根拠へと還帰する試みであったからである。

形而上学の克服としての、形而上学の根拠への還帰によって「そこから『存在と時間』が存在忘却という根本経験のうちで経験された次元の場合へと始めて達するのである。」——このハイデガーの言葉を十分に理解し展開することとはここではできない。ただ以上の考察に基づいて次のことだけを指摘しておきたい。——形而上学の内部での転回とはメタ存在論への転化であった。メタ存在論はアリストテレス形而上学の二重性格での神学を取り返すことであった。転回は神学の取り返しとして構想されているのである。我々はこの「神学からのこの由来がなければ私は思惟の道に到らなかつただろう。しかし由来はつねに将来にとどまっている。」というハイデガーの言葉を想起する。それ故転回を「神学的始元への還帰」とする解釈を改めて検討する必要があるだろう。しかし「神学的始元への還帰」

は『存在と時間』の放棄ではなく、『存在と時間』がそのもとで書かれた形而上学構想のうちですでに考えられていたのである。とも角「神学からの由来」が「存在忘却という根本経験」といかなる関係にあるかが問い返されねばならない。——『ヒューマニズム書簡²⁷』に即した我々の「転回」解釈は、転回についてのより包括的な研究の最初の一步にすぎないのである。²⁸

五

『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた構想——しかも『存在と時間』がそのもとで書かれた構想——とは何かが本稿での我々の問いであった。我々の考察はそれが「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学構想であることを示した。

しかし『存在と時間』が實際形而上学構想のもとで書かれたのだろうか。『存在と時間』において「形而上学」への言及は極めて少ないし、しかも括弧つきである。『存在と時間』第一節は次の言葉で始まっている。「存在の問いは今日忘却されたままである、たとえ我々の時代が「形而上学」を再び肯定することを進歩だと思っているにしても。」(SZ, 2)「形而上学」は存在の問いを忘却しているものとされている。こうした「形而上学」に対し、存在の問いを取り返し、存在の意味への問いを問う基礎的存在論の構想が対置される。しかし存在の問いを忘却した「形而上学」が批判されているからと言って、本来的な形而上学が否定されていることにはならない。「形而上学」に括弧がついていることが逆に本来的な形而上学の存在を指示しているのではないか。また形而上学への言及が少ないことは、『存在と時間』が形而上学構想のもとで書かれたことを決して排除しない。それはアリストテレスの存在論の基本定式 τὸ οὐ λέγεσθαι ποιῶντος, ἀλλὰ πρὸς οὐ に言及していなからと言って、存在論としての『存在と時間』がアリストテレスの存在論の取り返しであることが否定されないので同様である。²⁹

我々はこの『存在と時間』に到るまでのハイデガーの形而上学との関係を簡単に見てみよう。一九〇七年の夏、ハイデガーはブレンターノの学位論文『アリストテレスによる存在者の多様な意義について』によって存在の問いへと目を開かれた。それは同時にアリストテレスの形而上学との出会いである。さらにカール・ブライヒを通して「存在論—神学」としての形而上学に注目することになる。「形而上学の建築構造としての存在論と思弁神学との間の緊張関係が私の視野のうちに入ってきました。」³⁰そして教授資格論文『ドゥンス・スコトゥスの範疇論と意義論』の結語において、ハイデガーは形而上学への志向を表明する。「哲学はその本来的な光学、すなわち形而上学を長い間無しで済ますわけにはいかない。」(Bd. 1, S. 406)最後に我々はハイデガーのアリストテレス研究に触れなければならぬ。『存在と時間』出版以前にハイデガーはアリストテレス研究者として認められていたのであり、マールブルグ大学に招聘された（一九二三年）のは、彼のアリストテレス研究の草稿によってであった。さらに『存在と時間』の執筆と平行して、アリストテレス研究の発表準備が進められていたことに注目しなければならない。アリストテレス研究が発表されなかったのは、『存在と時間』そのものがその根本においてアリストテレスの批判的継承であったからである。³¹それ故アリストテレスの形而上学における「存在論—神学」という二重性が『存在と時間』の構想と全く無縁であったとは考えられない。むしろ『存在と時間』は「存在論—神学」としてのアリストテレス形而上学の取り返しとして構想されたのではないか。

事実『存在と時間』の哲学の定式が存在論の存在的基础という「未だ隠されている原則的な問題」を含んでいた。「すべての哲学的に問うことが実存から発し、実存へと打ち返す」という哲学の定式の言葉が、「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学を指し示しているのである。——『存在と時間』の明示されたプログラムを越えた形而上学構想は『存在と時間』に即して、確認されたのである。

さらに我々は『存在と時間』のうちに形而上学構想への指示を見出すことができる。³²ハイデガーは『存在と時間』

第四四節「現存在と開示性と真理」において次のように言っている。「存在——存在者ではなく——が「与えられている」のはただ、真理が存在するかぎりにおいてのみである。そして真理が存在するのはただ、現存在が存在するかぎりにおいてのみであり、またそのあいだだけである。存在と真理は等根源的に「存在する」。存在がすべての存在者から区別されるべきであるにもかかわらず、存在が「存在する」とは何を意味しているのかは、存在の意味と存在了解一般の射程とが解明されたときはじめて具体的に問われうる。そのときはじめて存在そのもの、その諸可能性と諸変化についての学の問題に何が属しているのかも、根源的に論究されうる。」(SZ, 230) この「存在——真理——現存在」の關係は『現象学の根本問題』第二部第四章「存在の真理性格」の主題であった(二)。この問題は存在論の存在的基础、メタ存在論への転化へと我々を導いた。「存在が「存在する」とは何を意味しているのか」という問いのうちには、「存在が「与えられている」のはただ、現存在が存在するかぎりにおいてのみである」という存在論の存在的基础の問題が潜んでいるのである。「現存在が存在しているかぎりにおいてのみ、すなわち存在了解の存在的可能性 *ontische Möglichkeit* が存在しているかぎりにおいてのみ、存在が「与えられている」。」(SZ, 212) 「存在の意味と存在了解一般の射程とが解明される」のは、『存在と時間』第三編においてである。存在の意味が解明されること(存在のテンポラリテートの分析論)が、「存在が「存在する」とは何を意味しているのか」という問い(存在論の存在的基础の問題)、それ故メタ存在論への転化へと導く。とすればそのときはじめて論究される「存在そのものについての学の問題」にはメタ存在論が属することになるだろう。「存在そのものについての学の問題が論究される」ことのうちには、「基礎的存在論——メタ存在論」としての形而上学を提示することが含まれていたのではないか。

さて、『論理学』でアリストテレス形而上学の二重性について次のように言われていた。「第一哲学としての哲学は二重の性格をもつ。哲学は存在についての学であり、圧倒的なものについての学である。(この二重性格は実存と

被投性の二重性に対応している。)(Bd. 26, S. 13)「存在論—神学」としての形而上学の二重性格が実存と被投性の二重性に対応しているのであれば、『存在と時間』における「被投的企投」geworfener Entwurf がすでに形而上学の二重性を暗示しているのではないか。被投的企投が、存在の存在機構であるが故に「カントと形而上学の問題」で「現存在の形而上学は単に現存在についての形而上学であるだけでなく、現存在として必然的に生起する形而上学である。」と言われるのである。現存在の形而上学が「現存在として必然的に生起する形而上学」であるということ³⁵を、我々は「被投的企投が形而上学の二重性の根拠である」ことのうちで理解しなければならない。このことによつてのみ「基礎的存在論は単に現存在の形而上学の第一段階にすぎない。」という言葉が理解されるのである。現存在の形而上学は「現存在として必然的に生起する形而上学」であることによって、被投的企投(実存—被投性)に対応する「存在論—神学」という二重性格をもつ。現存在の形而上学の第一段階(実存・企投に対応)が基礎的存在論であるのに対し、第二段階(被投性に対応)はメタ存在論である。前者が存在論的—実存論的に問うのに対し、後者は「メタ存在論的—実存的に問う」(Bd. 26, S. 139)のである。「現存在の形而上学は現存在として必然的に生起する形而上学である」というテーゼは、「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学を示しているのである³⁶。

本稿での我々の考察は『存在と時間』の哲学の定式から出発した。我々は「そこからすべての哲学的に問うことが発し、そこへと打ち返す」という表現のうちに、「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学構想を読み取った。哲学の定式は『存在と時間』が「実存の分析論としての現存在の解釈学から出発する現象学的存在論」であることを主張しているだけでなく、『存在と時間』の明示されたプログラムを越え、しかも『存在と時間』がそのもとで書かれた形而上学構想をも示しているのである。

『存在と時間』がそのもとで書かれた形而上学構想を捉えることによって始めて、「存在了解一般を可能にする地平として時間を学的に解釈することが以下の論述の暫定的な目標である。」(SZ, 1)という言葉を理解できる。「存

在了解一般を可能にする地平として時間を学的に解釈すること」は第三編の課題「存在への問いの超越論的地平として時間を説明すること」(第一部の表題の後半)であり、基礎的存在論の根本課題である。それ故この「暫定的な目標」は基礎的存在論としての第一部全体を包括している。ではこの目標の暫定性は第二部の課題「存在論の歴史の解体」に対して言われていることになるのだろうか。しかし第二部は第一部第三編「存在のテンポラリテートの分析論」の成果に基づいて、存在のテンポラリテートを導きの糸として遂行される。第二部も基礎的存在論の理念のもとにあるにすぎない。

「暫定的な目標」が基礎的存在論の理念全体を意味しているのであれば、この目標の暫定性は基礎的存在論を越えた目標に対して言われているのでなければならぬ。とすれば目標の暫定性は『存在と時間』の明示されたプログラムの越えた形而上学構想に対して言われていることになる。「在了解一般を可能にする地平として時間を学的に解釈することが以下の論述の暫定的な目標である」という『存在と時間』の第一頁の言葉は、基礎的存在論としての『存在と時間』を包括した形而上学の存在を示しているのである。

それ故『存在と時間』は途上に *unterwegs* (SZ, 437) ある。『存在と時間』は存在一般の意味への基礎的存在論的問いに具体的に答える第三編「時間と存在」への途上にあるだけでなく、「メタ存在論への転化、転回」への途上にある。言い換えれば『存在と時間』は基礎的存在論への途上にあるだけでなく、形而上学への途上にある。しかもメタ存在論への転回の試み(形而上学の内部での、形而上学の根拠への還帰)が形而上学の克服へとハイデガーを強いるが故に、『存在と時間』は形而上学の克服への途上にある(Vgl. Bd. 9, S. 368, 372)。『存在と時間』は途上にある、*unterwegs* へと行く途中「*ein Weg*」(SZ, 436)なのである。「この途は存在への問いが我々の現存在を揺り動かすべきであるならば、今日でもなお一つの必然的な途であり続ける⁶⁸⁾。」

『存在と時間』の明示されたプログラムを越え、しかも『存在と時間』がそのもとで書かれた構想とは、「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学の構想である。しかもそれは「存在論—神学」としてのアリストテレスの形而上学の取り返しとして構想されたのであり、その意味で『存在と時間』は西欧形而上学の正統な嫡子なのである。我々は形而上学としての、『存在と時間』の根本構想をその哲学の定式のうちに見出すことができる。本稿での我々の考察はそこから出発し、そこへと帰るのである。

「哲学は普遍的な現象学的存在論であり、現存在の解釈学から出発する。現存在の解釈学は、*Existenz* の分析論として、すべての哲学的に問うことの導きの糸の端を、そこからすべての哲学的に問うことが発し、*entspringen*、そこへと打ち返す、*zurückschlagen* ところに結びつけているのである。」

注

- (1) 拙論「存在論としての『存在と時間』」（『哲学年報』第四十一輯）参照。
- (2) M. Heidegger, *Sein und Zeit*, S. 38 (以下 SZ と略)
- (3) M. Heidegger, *Gesamtausgabe* Bd. 9, S. 327 f. (以下 Bd. 9 と略)
- (5) 本稿は拙論「存在論としての『存在と時間』」の続稿である。そこで次のように言われていた。「存在論としての『存在と時間』の根本構想を捉える試みである本稿は、『存在と時間』の形而上学構想を捉えるための、最初の一步にすぎないのである。」（前掲拙論、註(5)）本稿はこの最初の歩みをさらに進める試みである。
- (6) SZ, Vorbemerkung
- (7) 拙論「存在論としての『存在と時間』」が前者を、そして本稿「形而上学としての『存在と時間』」が後者を捉える試みである。
- (8) Vgl. Bd. 24, S. 473, Bd. 2, S. 581 f., Bd. 9, S. 134 Anm. (b)
- (9) 「我々は哲学の概念をより具体的に限定する可能性を獲得する。かくして第三部の考察は再び講義の出発点に立ち帰るのである。」

ある。」(Bd. 24, S. 32) この言葉は『現象学の根本問題』が円環をなしていることを示している。しかしこの円環は「哲学の概念」へと還帰することによって閉じられるのではない。哲学の概念は「存在論—神学」⇌形而上学として、それ自身のうちに、存在論から神学(メタ存在論)への転化を含んでいるのだから。哲学は、「存在論的なもの」と「存在的なもの」との緊張関係のうちにある (Vgl. Bd. 24, S. 466)。

(10) 「取り返し」については前掲拙論参照。

(11) 一九二八年夏学期の講義題目は単に『論理学』とわけてゐた。Vgl. Bd. 26, S. 287, William J. Richardson, *Heidegger. Through Phenomenology to Thought*, p. 666

(12) Vgl. M. Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, §1 (以下 KM と略) Bd. 25, §1

(13) 『存在と時間』(三八頁)で哲学のすべての問うことが「実存へと打ち返す」と言われている。(Bd. 9, S. 343) 哲学の定式のうちに「実存」「発する」「打ち返す」の三つの言葉だけが、イタリックになっていることに注意すべきである。この三つの言葉によって、形而上学構想が示されるのである。

(14) 「存在は存在者を根拠づけ、最高の存在者としての存在者が存在を基礎づける。」(M. Heidegger, *Identität und Differenz*, S. 62)

(15) 何故『論理学』に補遺という形で、ハイデガー自身の形而上学構想が提示されたのだろうか。それは『論理学』自身が形而上学の二重性という問題そのものに深く関わっているからではないか。ハイデガーは「問題地平の射程を見るために、また同時に以下の問題の具体的論究において必然的にその上を我々が動かかねばならない狭い小道を見失わないために」(Bd. 26, S. 202)と語っている。この「狭い小道」は「メタ存在論への転化」へと通じているのではないか。このことは『論理学』の検討によってのみ答えられる。さらに次のことを指摘したい。「以下の問題」とは「根拠の問題」であり、そこから『根拠の本質について』が成立した。「根拠の問題」が形而上学の二重性に深く関わっているのであれば、『根拠の本質について』にも同じことが言える。『根拠の本質について』は『カントと形而上学の問題』『形而上学とは何か』と同じく一九二九年に発表された。とすれば一九二九年の三部作は形而上学構想、しかもメタ存在論への転化、転回という共通の問題意識のもとで書かれたのではないか。我々は一九二九年の三部作の再検討へと導かれる。註(28)(33)(34)(37)参照。

(16) 以上について前掲拙論参照。

(17) 以上について前掲拙論参照。

- (18) 存在一般の理念について「実存の主題的分析論」(SZ, 436) が展開された後に、「存在論の存在的基础」という問題が提示される——このことが否定されるわけではない。『存在と時間』の深まりゆく円環「存在→現存在→時間→存在→現存在」の最後において、言い換えれば基礎的存在論の展開の頂点においてメタ存在論への転化が構想されていた、と考えられる。(Vgl. SZ, §83)
- (19) Vgl. William J. Richardson, Heidegger. Through Phenomenology to Thought, XXI, M. Heidegger, Zur Sache des Denkens, S. 9
- (20) ハイデガーは転回について言及したすぐ後にサルトルについて次のように言っている。「サルトルはそれに対し実存主義の根本命題を「実存は本質に先立つ」と言っている。彼はその際実存と本質を、本質が実存に先立つと言うプラトン以来の形而上学の意味で理解している。サルトルはこの形而上学の命題を逆転する *umkehren*。しかし形而上学の命題の逆転は形而上学の命題に *gegenüber*。」(Bd. 9, S. 328) ニーチュにおける形而上学の逆転 *Umkehrung* については Vgl. Holzwege, S. 214, Vorträge und Aufsätze, Teil I, S. 71
- (21) 「存在と時間」に於ける決定的な拠点は、ハイデガーがかつて或る談話で語ったのであるが、存在と時間の中にそれぞれ独立に離れて存在しているのではなくして或る程度「と (und)」の中に即ち両者の内的な本質的連関の中にいわば今日まで殆ど気付かれなかった両者の共属関係の中に存在している。……結局のところ、以前の彼の所論から彼の思考が逆転したとか或いは加之彼の思考がそれしてしまったのであるといかにももっともらしく解釈されているような、ハイデガーの所謂「転回」(Kehre) はすでに「存在と時間」の中にしかも自らの中にアプリオリにすでに転向を含むものとして考えられているままたかの「と」の中に包み込まれているのである。……」ハルトムート・ブフナー「ハイデガーに関することども」(『理想』一九五八年十月三〇号)
- (22) 「全体」——それは「存在と時間」・「時間と存在」という事象 (事象の関わり) Sachverhalt を意味する。William J. Richardson, Heidegger. Through Phenomenology to Thought, XIX, Vgl. M. Heidegger, Zur Sache des Denkens, S. 4, 20, 47
- (23) 前掲拙論参照。
- (23) 「形而上学の形而上学」については Vgl. KM, S. 223, 243
- それに対する批判については Vgl. Nietzsche II, S. 244, 344, 370, Bd. 5, S. 264, Vorträge und Aufsätze, Teil I, S. 71

(24) 「転回の思惟は私の思惟における転換です。しかしこの転換は『存在と時間』における立場の変更、いわんや問題設定の放棄に基づいて生じるものではありません。私が『存在と時間』という思惟されるべき事象にとどまっていたこと、すなわち、すでに『存在と時間』(三九頁)のうちに「時間と存在」という表題のもとで提示された観点に従って問うことから、転回の思惟が生じるのです。」(William J. Richardson, Heidegger, Through Phenomenology to Thought, XVII) ハイデガーはいつ、転回を構想したのか、そして転回はどこで生起するのか——この問いに対し今や我々は答えることができる。

「いつ」に対しては三つの答えが可能である。

- (1) 『存在と時間』の構想のうちで、すでに考えられていた。
 - (2) 『存在と時間』第三編を仕上げる試みのうちではじめて、転回に達した。
 - (3) 『存在と時間』第三編を仕上げることを断念すること、『存在と時間』の放棄によって、転回が生じる。
- 我々は「基礎的存在論のメタ存在論への転化」としてすでに、『存在と時間』の形而上学構想のうちで、転回が考えられていると主張したい。しかしこの転回の試みが、形而上学の克服としての転回へとハイデガーを強いたのである。

「どこで」に対して四つの可能な選択肢がある。

- (1) 『存在と時間』第二編から第三編へ(第一部の内部で)
 - (2) 『存在と時間』第一部から第二部へ(基礎的存在論の内部で)
 - (3) 『存在と時間』全体である基礎的存在論からメタ存在論へ(形而上学の内部で)
 - (4) 形而上学から形而上学の克服(存在の真理の思惟)へ
- 我々は(3)を主張する。しかし(3)の試みが(4)の転回へと深化するのである。存在史としての転回(存在そのもののうちの転回)は本稿の考察を越えている。

(25) M. Heidegger, Unterwegs zur Sprache, S. 96

(26) K. Löwith, Heidegger. Denker in dürftiger Zeit, S. 20 Anm.

(27) 『ヒューマニズム書簡』それ自身が、『存在と時間』の形而上学の蔽いを取り除き、そこから『存在と時間』が思惟された根本経験へと己れを解き放ち、そのうちにある根源的な可能性を己れのものにする(『存在と時間』がそこから経験された次元の場へと達する)試みである。『ヒューマニズム書簡』は『存在と時間』そのものの解体 Destruction の試みなのであ

る。

(28) 「存在忘却という根本経験」と、「存在への問い」との関係を、さらに我々は問わなければならない。

「真理について」という講演は「存在と時間」から「時間と存在」への転回の思惟に対して、或る洞察を与える」と言われている。本稿での考察に基づいてさし当り次のことが指摘できる。『現象学の根本問題』において「存在論の存在的基础」の問題、すなわちメタ存在論への転化へと導くのは、「存在の真理性格」を介してであった。「存在—真理—現存在」という問題連関のうちで転回が考えられているのである。——とも角「形而上学の内部での転回」を十分に理解することなしには転回の解明は不可能である——このことだけは主張しておきたい。「形而上学の内部での転回」という論点は、ハイデガーの一九二九年の三部作を解釈する鍵になるはずである。

(29) 前掲拙論参照。

(30) M. Heidegger, *Zur Sache des Denkens*, S. 82

(31) このアリストテレス研究において、「存在論—神学」としての形而上学の二重性が、当然主題となったのであろう——ナルプ、イエーガーのアリストテレス研究との批判的対決を通して。(Vgl. Bd. 26, S. 17)

(32) 前掲拙論参照。

(33) 形而上学が存在者を超える学であるとするれば、超越が形而上学を可能にする。しかも「存在論—神学」としての形而上学が「存在論的差異のその都度の具体化」(Bd. 26, S. 202)であり、存在論的差異の根拠が現存在の超越である(Bd. 9, S. 135)とすれば、超越が形而上学の二重性の根拠である。超越は形而上学の根本問題である。もし現行の『存在と時間』が「超越の具体的露呈的企投」(Bd. 9, S. 162 Anm. (59))のみを課題としていたと言えるならば、「存在と時間」は形而上学そのものを目差していたことになる。

(34) Vgl. SZ, 148, 223, 285 被投的企投は「真理—非真理」(SZ, 223)、「根拠であることの無性」(SZ, 285)に関わっている。被投的企投が「存在論—神学」としての形而上学の二重性に対応しているとするれば、「真理—非真理」「根拠であることの無性」も形而上学の二重性に対応するだろう。とすれば、『真理の本質について』『根拠の本質について』は形而上学のこの二重性から思惟されていると言えるのではないか。

(35) KM, S. 224

(36) KM, S. 225

- (37) 『カント書』は基礎的存在論の理念によって汲尽くされるのではなく、根本的には「基礎的存在論—メタ存在論」としての形而上学という問題意識によって貫かれている。だからこそ『カントと基礎的存在論の問題』ではなく『カントと形而上学の問題』なのである。『カント書』の第一節でアリストテレスの形而上学の二重性が論じられているのは単なる歴史的回顧ではない。そして『カント書』の最後の節（第五節「基礎的存在論の理念と純粋理性批判」）は、形而上学の二重性に即してのみ理解されうるのである。『カントと形而上学の問題』は「形而上学の問題」（形而上学の二重性）によって初めと終りを囲まれ貫かれた「カント」解釈である。

- (38) SZ, Vorbemerkung

- (39) 本稿のこの結論に付てはじめて「形而上学は存在—神—学 *Onto-Theo-Logie* *being*」(M. Heidegger, *Identität und Differenz*, S. 45)とラウナーゼと『存在と時間』との関係が明らかにされるべき。Vgl. Bd. 32, § 10 (a) 本稿の試みは、形而上学としての『存在と時間』を捉える最初の一步にすぎない。